

【収録2.】

2. 文珍さんの落語的見聞録 | 月 神戸新聞朝刊連載より転記 2025.1.16.

「助け合う気持ちと行動」

神戸新聞NEXT

文 化

2025年(令和7年)
1月16日
木曜日

神戸新聞社
〒650-8571
神戸市中央区東川崎町1-5-7

神戸新聞

落語的見聞録

桂文珍



阪神・淡路大震災から30年、ついでこの間のような気もするし、遠い昔のようにも思う。

あの日、神戸の自宅にて、新幹線で東京に行く予定だった。寝ているとドーンという音、グラグラと大きな揺れに飛び起き、外に寝間着のまま出た。妻は飼っていた猫、名はゴゴロウ(桂小五郎にあやかってつけた)が暗いうちから凄まじい鳴き方をするのでおながすいたのだと、屋外で餌を与えていた。暗い中、2人ともに助かった。

少しずつ明るくなり、街を見るとき、あちこちから煙が上がって炎も見えた。火事だが消防も動けない状態。わが家も半壊、やがて危険なので入らないようにと、入り口には赤い紙が貼られた。全壊と同じことだった。

阪神高速神戸線は横倒し、でも番房の出番があったので、ミニバイクで難波まで通ったが、1年で一番寒い時期、鼻水が凍った。橋を渡ることに被害は少ない様子。つらかったが高座から見えるお客さまの笑顔に癒やされた。

そして全国からの援助、誠にありがたく、ボランティアという言葉が定着し始めたのもあの震災から。以降も東日本大震災、能登半島地震と、いつ何があっても不思議でないこの国、大切な助け合う気持ちと行動だと、しみじみ思う。

落語「富久」では、期間の久蔵、酒癖が悪く、得意先芝の旦那をしくしく、くさつしていると、知り合いに富くじを勧められ「松の百十番」の札を買い、神棚にしまつて当てるよう祈つて寝る。夜中に半鐘の音が、火事はしくじった旦那の家の方、すわ一大事!と、駆けつけ、手伝いをする。幸い類焼を免れ、よくやってきたので、旦那から出入り

助け合う気持ちと行動

ある日、八幡様の前を通ると、大、ナント、松の百十番が千両当たっている。でも火事で札は焼けてしまった落胆していると、町内の頭が「留守中、布団と釜、それに大切にしていた神棚を出してやってきたから取りに来い」。行くと、神棚の中にお札が、あった!と、なかなかいい。斬。ちなみにわが家の猫は地震から10日後に痩せて帰ってきた。命の「恩猫」、名前を木戸孝允に愛えたが、呼んでも返事はしなかった。(かつら・ぶんちん落語家)

次回は2月20日

神戸在住の桂文珍さんも阪神淡路大震災への思いもひとしお。一緒に暮らしてきた「猫」のおかげで、ご夫妻ともども半壊の家から抜け出せ、助けられたという。そして、当時の状況もありありと。

落語は「富久」 酒癖の悪い太鼓持ち久蔵がしくじった旦那の家が火事。一大事と駆け付け、家に帰ると我が家は全焼。勧められて買っていた富くじが当たっていたのに、家が全焼でバーに。落胆していると町内の頭が家から家財と共に富札を置いた神棚も外にだして保管してくれていて、千両の大当たり。

みんなの助け合う心が自分にも戻ってくる
という古典落語の名作。